



兵庫県における中高生の居場所施設の実態

伊藤, 茅花
河本, 大地

(Citation)

兵庫地理, 69:61-75

(Issue Date)

2024

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100489582>



兵庫県における中高生の居場所施設の実態

伊藤茅花・河本大地

I. はじめに

1) 研究の背景と目的

現代の子どもたちの多くは、地域のコミュニティの中で育つことが難しくなっている（木下・矢部・今井、2008）。虐待やいじめ、不登校、自殺の増加などの課題が複雑化する中で、子どもや若者が学校や家庭以外に安心して過ごせる場所をつくる必要がある。2021年12月21日に閣議決定された「こども政策の新たな推進体制に関する基本方針」では、今後のこども政策の基本理念として、「全てのこどもが、安全で安心して過ごせる多くの居場所を持ちながら、様々な学びや、社会で生き抜く力を得るための糧となる多様な体験活動や外遊びの機会に接することができ、自己肯定感や自己有用感を高め、幸せな状態（Well-being）で成長」できるようにすることの重要性が掲げられた（内閣官房ウェブサイト）。

「こどもの居場所」づくりは、2023年4月に発足したこども家庭庁が掲げる政策の柱の1つにもなっている。これまでは「子ども食堂」や「児童館」などがこどもの居場所の役割を果たしてきたが、いずれの場合も多くは小学生までを対象としており、中高生世代の居場所が少ない。2001年に厚生労働省が行った調査によると、全国の児童館数は4,577館であり、そのうち「中高生対象の活動がある」とする施設は20.5%の940館であった。また、1996年の全児連調査では、全児童館数が4,127館で「思春期対応あり」の施設は10.9%の449館であったことから、全国の児童館における中高生（思春期）対応は、およそ2倍に増えており、今後も増加すると推測される（定行・根橋、2004）。

現在、地方自治体がこどもの居場所づくりを推進するために行う実態調査の補助を行っており、さらには居場所づくりのモデル事業への助成などを行っている。これらのことから、全国の自治体やNPOなどによる中高生の居場所が増加しており、

今後さらに増加すると予想される。

なお、関連する既往研究には、中高生対応の児童館を扱った定行・根橋（2004）、中高生の居場所施設の成立条件を扱った木下・矢部・今井（2008）があげられる。また、子どものための環境づくりは、基本的には大人の一方的なやり方で行われてきたが、1994年に日本も子どもの権利条約に批准したことが契機となって、子どもの権利としての参加が重視され、決定のプロセスにも子どもの意志が表明されるようになってきた。中高生はただ受動的に自らを取り巻く環境を捉えるだけではなく、自らの意志を表現し、能動的により良い環境を創造する主体として位置づけられる。先行研究では、居場所のあり方や成立条件が述べられているが、居場所施設が各地で新設され、増加している現在、居場所を継続する方法の検討も必要となっている。

こども家庭庁の調査（こども家庭庁ウェブサイト）では、「居場所と感じるかどうかは、こども本人が決めることであり、そこに行くかどうか、どう過ごすか、その場をどのようにしていきたいかなど、こども・若者が自ら決め、行動する姿勢など、こどもの主体性を大切にすることが求められるとされている。また、居場所の特徴として、個人的なものであり、変わりやすく、地域性や目的、人との関係性などに影響を受けるものであるとされている。

これらのことから、こどもの視点に立ち、こどもの声を聴きながら居場所づくりを進めることが必要と言える。「居たい・行きたい・やってみたい」（こども家庭庁ウェブサイト）の3つの視点がこども・若者の主体性を尊重しながら居場所づくりを行ううえで重要である。そこで本稿では、居場所づくりを行う手段の1つであるイベントに着目する。

以上をふまえ、本研究の目的は、兵庫県における中高生の居場所施設の実態を明らかにすることとする。特に、実施されているイベントの種類や目的、特徴の違いに注目する。

2) 研究方法

公益財団法人兵庫県青少年本部の2023年度「若者の居場所」紹介ページに掲載されている24施設を調査の対象とする。兵庫県青少年本部は、以下の4要件に当てはまるものを「若者の居場所」としている。

- (1)兵庫県内に活動拠点を置いている
- (2)誰でも気軽に立ち寄ることができる（以下の内容のいずれかが概ね当てはまる）
 - ・学生に限らず40歳までの若者を中心に、誰でも気軽に集まることができる
 - ・中高生でも立ち寄れるように無償、もしくは低額で利用することができる
 - ・勉強や遊びなど、したいことができ、人との交流もできる
 - ・ひきこもりや就職難など、様々な悩みを相談することができる
- (3)若者の育成・支援・相談に関わるスタッフが配置されている
- (4)兵庫県青少年本部のウェブサイトと連携して広報ができる
 - ・青少年本部のウェブサイト等で広報活動が可能
 - ・青少年本部と情報交換や連絡調整が可能

上記施設のウェブサイトを開覧し、運営団体はどこか、複合施設に属しているか、週あたりの開館時間はどうかを把握した。また、週あたりの開館時間による施設運営の違いについて調査した。

次に、「若者の居場所」として登録されている24施設の運営スタッフにアンケート票を送付し、回答を得ることができた12施設について、設立年、年間来場者数、スタッフ数、施設の備品、部屋の種類、年間イベント数、イベントの種類、イベントの地域連携、イベント課題を把握した。

そして最後に、地域ごとのイベントの数や種類等の違いを把握するため、以下の2施設においてインタビュー調査を行うとともにイベントの様子を確認した。ひとつは政令指定都市の神戸市にあり、来

場者と年間イベント数が100を超える「居場所B」を対象とした。もうひとつは中核都市である尼崎市にあり、来場者が最も多く年間イベント数が100に近い「居場所D」を対象とした。これら2施設について、イベントの立案の仕方や中高生の主体性を促す方法などを調査した。

II. 兵庫県における居場所の経緯

兵庫県においては、中高生の居場所づくりは1980年頃から始められており、全国的には1998年代以降に急速に広まったことを考えると、対応が早かったと考えられる。中高生の居場所には、児童館の一部のスペースが活用される場合や単独の施設として設けられる場合など様々な対応の仕方がある。児童館の中高生対応に関して、設置数の多い上位5都道府県を順にあげると、1996年の全児連調査では東京・愛知・北海道・兵庫・広島、2001年の厚生労働省調査では東京・兵庫・京都・愛知・大阪となり、東京はもとより関西地域の増加が顕著である。この調査からも、兵庫県の中高生の居場所対応は全国的にみて早かったことがわかる。

兵庫県の24施設の中で最も早く誕生したのは、1980年に設立された居場所Bである。1980年代から2000年にかけては、全国的に青少年の非行が課題となり、神戸市も例外ではなかった。神戸市は特に鉄鋼業や製造業を行う工場が多く存在し、全国から出稼ぎに来る青少年が多かった。仕事以外での仲間づくりの困難さや余暇の時間の使い方に苦戦し、居場所を見つけられず、非行に走る少年が増加したという。これらを問題視し、居場所Bができた。

現在、神戸市では各区にそれぞれ中高生の居場所施設が設置されており、計10箇所 に及んでいる。これらはネットワークを形成し、それぞれの施設の情報共有をするなど、居場所空間向上への工夫がなされている。

また、神戸市以外でも1999年から中高生の居場所づくりに先駆的に取り組んでいた「渋谷ファンイン」（渋谷区のボランティア団体が設立）の取り組みを参考に2003年10月、「若者ゆうゆう広場」が県内10箇所で開催された。「若者ゆうゆう広場」は、

地域の中高生などの 10 代の若者が、学校帰りなどに気軽に立ち寄り、集まった仲間たちとのんびりおしゃべりなどを楽しむ「たまり場活動」をベースに、音楽やスポーツなどの「サークル活動」や「ボランティア活動」など、「自分がやりたいこと」に「思いきり、のびのび」と取り組む居場所とされている。

兵庫県青少年本部では、事業開始当初から「若者ゆうゆう広場」を運営する団体に対し、運営費の助成を行ってきたが、2012年度からは従来の運営費助成を廃止し、広場を運営する先進団体が実施する広域事業（活動事例報告、交流会、人材育成、ネットワーク事業）などの実施に要する経費に対して助成（事業助成）を行ってきた。また、広場事業を円滑に進めるため、若者の居場所づくり推進員（調整員）を青少年本部内に配置するとともに、情報誌の定期発行やウェブサイトなどによる情報発信を行っている。さらに 2014 年度からは、それぞれの「若者ゆうゆう広場」は自主運営を行い、青少年本部は「ゆうゆうネットワーク」として意見交換や情報共有を図る機会を提供している。

その他は多様化・複雑化する若者の問題に対応するため、「若者の居場所」の運営団体により「若者の居場所ネットワーク」（以下、「ネットワーク」）を設置し、居場所情報を一元的に広報し活用を高めるとともに、ネットワーク構成団体の交流機会を提供し、居場所運営や若者支援の情報共有と相互の連携を推進することで居場所の充実強化を図り、若者の健全育成を支援している。

Ⅲ. 兵庫県における中高生の居場所施設の実態

1) 調査対象の概要

各施設のウェブサイトの閲覧やアンケート調査により、24 施設の居場所の実態把握を行った。アンケート調査では第 1 表で示すように、24 施設中 12 施設から回答があった。居場所は週あたりの開館時間が長い順に並べている。

2) 中高生の居場所施設の分布

兵庫県の居場所施設の分布について、公益財団法人兵庫県青少年本部「若者の居場所」に登録されて

第 1 表 調査対象の中高生の居場所施設

居場所	週あたりの開館時間(H)	設立年	地域	アンケート
A	85		阪神北	
B	84	2017	東播磨	○
C	81	1980	神戸	○
D	80	2019	阪神南	○
E	80	2004	阪神北	
F	80		阪神北	
G	79	2015	丹波	○
H	70	2008	神戸	○
I	70	2000	神戸	○
J	58.5	1974	神戸	○
K	57		丹波	
L	55	2009	神戸	○
M	52	2005	神戸	
N	47	2006	神戸	○
O	46	2010	神戸	
P	46	2011	神戸	
Q	46	2016	神戸	○
R	45	2003	阪神南	○
S	40		阪神南	
T	20		北播磨	
U	10		丹波	
V	7	2023	北播磨	○
W	6		西播磨	
X	4		阪神南	

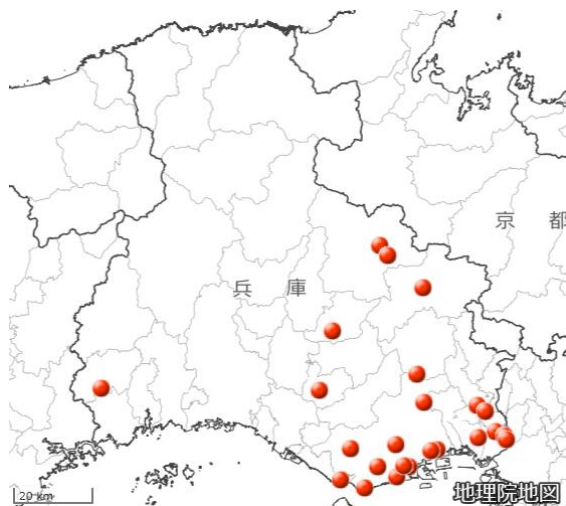
各施設のウェブサイトとアンケートをもとに作成。

いる施設の分布は第 1 図のとおりである。これを見ると、神戸・阪神地域に多いことがわかる。また、但馬地域や淡路地域ではみられなかった。

第 2 図のとおり、最も多い地域は神戸市で、10 施設である。神戸市には 1980 年から中高生の居場所施設があり、先駆的に活動を行っていた。また、市が「中高生活動拠点整備事業」を推進しており、各区にそれぞれ中高生の居場所施設を設けている。

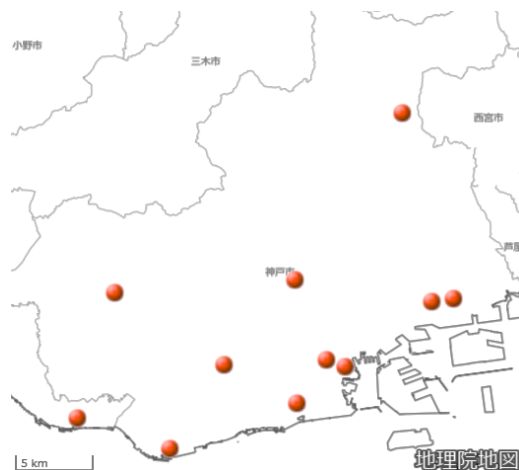
3) 中高生の居場所施設の広まり

兵庫県における中高生の居場所施設の設立年は、第1表のとおりである。ウェブサイトやアンケート調査から、16施設の設立年を把握した。第3図のとおり、2000年以降、毎年ほぼ1施設ずつ増えている。



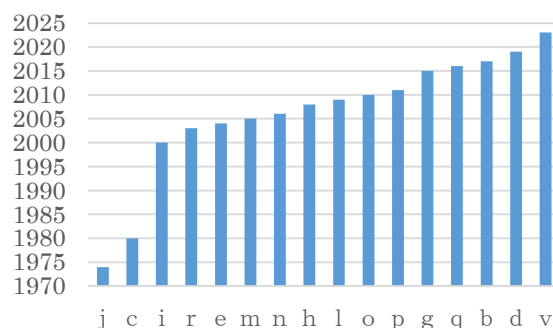
第1図 兵庫県における中高生の居場所施設の分布

地理院地図を用いて作成。淡路島については居場所施設の存在を確認できなかったため割愛している。



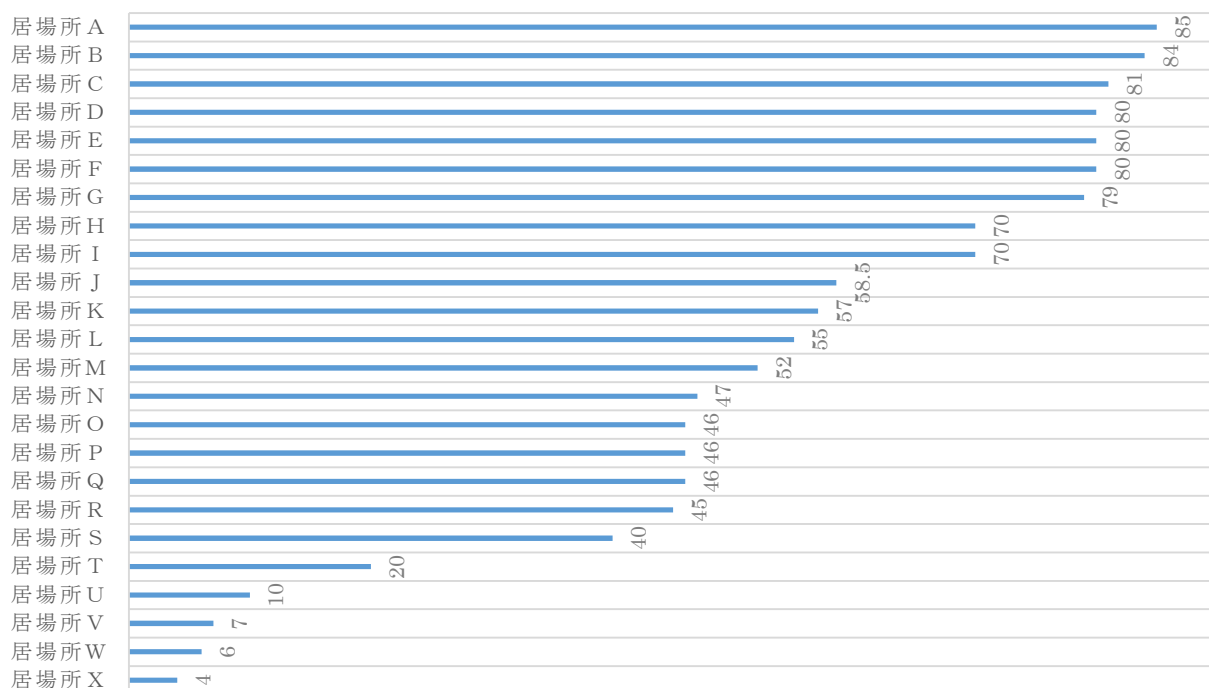
第2図 神戸市における中高生の居場所施設の分布

地理院地図を用いて作成。



第3図 中高生の居場所の設立年の傾向

ウェブサイトやアンケート調査で把握できた16施設について作成。



第4図 中高生の居場所施設の週あたりの開館時間

各施設のウェブサイトを用いて作成。

第2表 各居場所施設の特徴

	運営団体	市からの受託	複合施設の中に入っているかどうか	社会教育の詳細	児童館等の存在	フリースペース	学習スペース	音楽スタジオ	会議室	サークル室
A	市民活動活性化	○	社会教育	市民活動センター		○	○			○
B	青少年育成	○	社会教育	子育て支援 市民活動センター	○	○	○	○	○	○
C	青少年育成	○	商業			○	○	○	○	○
D	青少年育成	○	社会教育	生涯学習センター 子育て支援センター	○	○	○	○	○	○
E	市民活動活性化	○	社会教育	学習センター 公民館・図書館・児童館を合わせた施設	○	○	○			
F	市民活動活性化	○	社会教育	老人福祉センター 大型児童センター	○	○	○	○	○	○
G	市民活動活性化	○	社会教育	市民センター 男女共同センター		○	○			
H	青少年育成	○	商業			○		○	○	○
I	青少年育成	○	商業			○		○	○	○
J	福祉	○	社会教育		○	○				
K	福祉	○	社会教育	児童館		○				
L	青少年育成	○	商業			○				
M	青少年育成	○	社会教育	文化センター 図書館	○	○	○	○	○	○
N	青少年育成	○	商業	文化センター		○				
O	青少年育成	○	商業	文化センター	○	○	○	○		○
P	青少年育成	○	社会教育	文化センター	○	○		○	○	○
Q	青少年育成	○	商業	文化センター		○	○	○		○
R	青少年育成		社会教育	地域総合センター		○	○			
S	市民活動活性化	○	社会教育	市民交流戦センター		○	○	○		
T	市民活動活性化		商店街			○				
U	青少年支援		青少年支援			○	○			
V	青少年支援		青少年支援			○	○			
W	福祉		不明			○				
X	青少年支援		社会教育	・塚口南地域学習館		○	○			

各施設のウェブサイトと青少年本部 2023 年度「若者の居場所」紹介ページをもとに作成。

間、と大きく三つに分けられる。

4) 週あたりの開館時間

週あたりの開館時間は、第4図のとおりである。

79 時間～85 時間、40 時間～70 時間、4 時間～25 時

5) 運営団体と複合施設の概要

運営団体の種類は、第2表のとおりである。運営

団体は「市民活動活性化団体」「青少年育成団体」「福祉団体」「青少年支援団体」の4つに分けられる。

「市民活動活性化団体」は全世代を対象としており、地域住民に対する生きがいきり、社会参加を推し進める文化交流事業や、公共施設、センター等管理運営・受託事業を行っている団体が該当する。「青少年育成団体」は、青少年の自主活動を促進するとともに、青少年育成に取り組む地域社会に対して、野外活動のような、特徴やニーズに合った支援や指導を行っている団体が該当する。「福祉団体」は、社会福祉協議会が該当する。「青少年支援団体」は、不登校支援や青少年世代の障がい者支援などを行っている団体が該当する。

以降では、週あたりの開館時間による3区分ごとに運営団体と複合施設の概要を記す。

1. 週あたりの開館時間が79～85時間の施設

週あたりの開館時間が79時間～85時間と長いのは、居場所A～Gである。これらは週に1日は休館しているものの、開館時は9:00～21:00まで運営を行っている。また、市民活動活性化団体は4施設、青少年育成団体が3施設ある。

これらは、社会教育施設の一部として運営されている場合がほとんどである。社会教育の中でも、世代や分野を問わない、市民活動や生涯学習の分野を行っている施設が多い。公民館や図書館などを併設しているところもある。また、子育て支援や児童館が併設されている割合も高い。そして、全ての施設が市からの委託で運営されている。

2. 週あたりの開館時間が40～70時間の施設

週あたりの開館時間が40時間～70時間に該当するのは、居場所H～Sである。13:00～20:00に開館している施設が多い。

12施設中10施設が青少年育成団体を運営している。これらは文化センターに併設されている場合が多い。

また、12施設のうち9施設が神戸市にある。これらは市が設立し、文化センターに併設されている

場合が多い。文化センターは貸会議室・貸ホールなどを有し、文化・教養や健康スポーツに関する講座を開催している。そして、全ての施設が市からの委託で運営されている。

3. 週あたりの開館時間が4～20時間の施設

週あたりの開館時間が4時間～20時間である、居場所T～Xが該当する。市の施設ではなく、NPO法人が運営する単独の施設の中で行われている。そのため、週に2日程度、13:00～17:00の開催となり、開館時間が短い。また、常設の拠点を持たず、地域学習館を一時的に借りている団体もある。

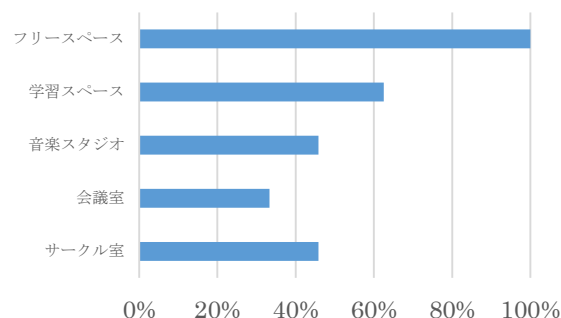
以上の3区分でみた実態からは、居場所施設を長時間運営するためには、市の委託で施設を運営し、全世代対象で市民活動や生涯学習の分野を行っている施設の一部で運営することが必要と考えられる。

6) 施設設備

居場所施設における施設設備の割合は、第5図のとおりである。

フリースペースは、おしゃべりをしたり、ゲームをしたり、飲食をしたりと、自由に過ごすことができるスペースである。中高生対応のスタッフが常駐している。本調査では、どの施設にもフリースペースが存在していた。中高生の居場所施設を運営するには、フリースペースは必要不可欠と考えられる。

学習スペースについては、フリースペースの一部を利用している施設もあれば、自習室を1部屋用



第5図 居場所施設における設備の割合

兵庫県青少年本部の2023年度「若者の居場所」紹介ページをもとに作成。

意している施設も存在する。兵庫県では、63%の施設で学習スペースが用意されている。

音楽スタジオでは防音対策がされており、ドラムやキーボード、ギターなどが使用できる。中高生は主にバンド活動に励んでいる。兵庫県では46%の施設が設置している。

会議室は、机と椅子が設置されている多目的の部屋である。青少年の育成などを目的とした登録団体が利用している。中高生の自主的な利用としてはイベントでの利用があげられる。兵庫県では33%の施設が設置している。

サークル室には、大きな鏡が壁一面に張り付けられており、ダンスに使用されるほか、卓球台や簡易バドミントンネットなどがあれば、多彩なスポーツを楽しむことができる。兵庫県では46%の施設で設置されている。

社会教育施設の中に中高生の居場所が存在する場合は、中高生以外の全世代も使用できる音楽スタジオ、会議室、サークル室を使用している。使用料を払わなければいけないが、登録をしている中高生

の場合は特別価格で部屋を借りることができるようになっている。価格はいずれも1時間500円未満と、中高生が利用しやすい価格帯となっている。

また、開館時間が0～20時間の施設では、音楽スタジオ、会議室、サークル室は存在しない。

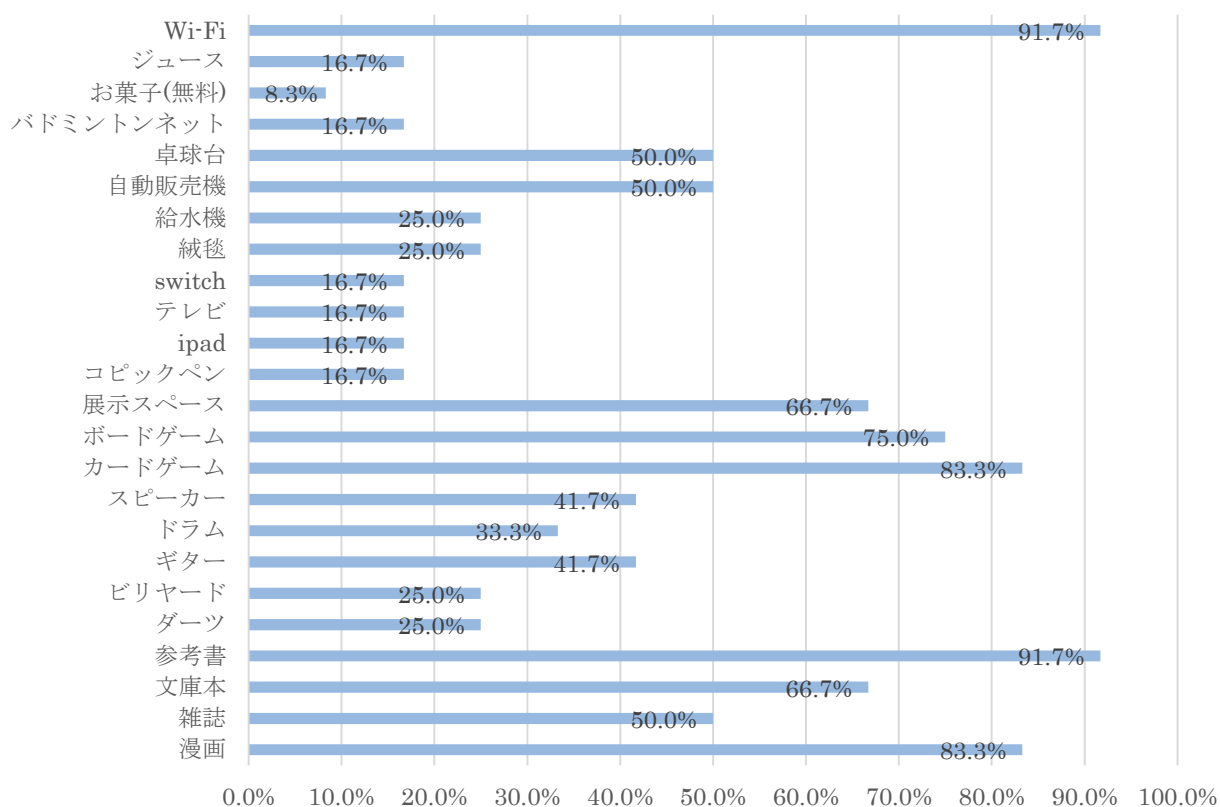
7) 施設備品

施設備品の割合は、第6図のとおりである。漫画(83.3%)・雑誌(50.0%)・文庫本(66.7%)・参考書(91.7%)といった図書関係がいずれも50%を超えている。また、カードゲーム(83.3%)やボードゲーム(75.0%)などのゲーム類も50%を超えている。

以上から、居場所を運営するには、図書館系とゲーム類を用意する場合が多いことがわかる。また、Wi-Fiは91.7%であり、ニーズが大きいことがわかる。

8) 年間利用者数との関係性

居場所Dが最も多く利用されており、年間利用者は70,000人である。また、居場所B,C,D,H,Iは年間



第6図 中高生の居場所施設における設備の割合（アンケート調査をもとに作成。）

利用者が10,000人を超えている。年間利用者が10,000人以上である居場所B,C,D,H,Iと、年間利用者が10,000人以下である居場所G,J,L,N,Q,R,Vに分けて、年間利用者数の差が生まれる要因を検討する。

1. 年間利用者10,000人を超える施設の特徴

①年間利用者と開館時間の関係性

年間利用者が10,000人を超える施設は、居場所B,C,D,H,Iである。全ての施設で週あたりの開館時間が70時間を越えていることが読み取れる。

しかし、開館時間が長ければ長いほど利用者が多くなるという相関関係は見られず、週あたりの開館時間が80時間である居場所Dが最も年間利用者が多く、週あたりの開館時間が84時間であり最も長い居場所Bは、年間利用者が2番目に多く40,000人である。

このことから、開館時間が70時間を越えると利用者が多くなるが、開館時間が長くなればなるほど利用者の数が増えるという相関関係は見られない。

②年間利用者数とスタッフ人数

居場所C,D,Hでは、常勤と非常勤のスタッフを合わせて10人以上が勤務している。さらに、特に利用者が多い居場所Cでは常勤スタッフが7人、居場所Dでは8人となっている。このことから、スタッフの人数が多いほど、利用者数は多くなるが、常勤スタッフの人数が多いほど利用者が多くなることが読み取れる。

常勤スタッフは居場所に常駐している頻度と時間が多いため、利用者と何度も顔を合わせ、関係性を築きやすくなることが理由のひとつと想定される。また、スタッフの人数が多くなることで、一人で来館する利用者も話し相手や遊び相手が増え、スタッフが利用者同士をつなぐ役割を果たす。そうすることで、利用者の充実度が向上し、リピーターや友人への紹介が増加すると推察される。

③年間利用者数と施設設備・備品

居場所B,C,Dの施設設備はフリースペース、学習

スペース、音楽スタジオ、会議室、サークル室の5種類全てが使用できるようになっている。居場所H,Iは学習スペースは存在しないものの、他の4種類は設備されている。

また、定番である図書関係やカードゲーム類に加えて、ギターやドラムなどの楽器類や卓球台が備品をして用意され、備品の種類が幅広くなっている。年間利用者が多い居場所C,DではSWITCHが備品として用意されている。

これらのことから、施設設備や備品の種類が幅広いほど、利用者は過ごし方を選べることから、来館者の増加につながると推察できる。

2. 年間利用者10,000人未満の施設の特徴

①年間利用者と開館時間の関係性

年間利用者が10,000人を超える施設は、居場所G,J,L,N,Q,R,Vである。居場所Gのみが週あたりの開館時間が70時間を越えているが、居場所J,L,N,Q,R,Vは70時間未満である。居場所Gでは開館時間は長いものの、生涯学習センターの一部のスペースが中高生用とされているため、使用できる施設設備や備品や、スタッフの数が少ない。これが、中高生の来館者が2,556人にとどまっている要因と考えられる。

②年間利用者数とスタッフ人数

居場所G,J,L,N,Q,R,Vは、常勤と非常勤のスタッフが合わせて10人を超える施設があるものの、いずれも常勤スタッフは3人以下である。これらのことから、やはり常勤スタッフの数が多く、年間来場者数の増加にはつながることが推察される。

③年間利用者数と施設設備・備品

施設設備に関しては、居場所Qのみがフリースペース、学習スペース、音楽スタジオ、サークル室の4種類が設備されているものの、居場所G,R,Vはフリースペースと学習スペースの2種類であり、居場所J,L,Nはフリースペースのみであることが読み取れる。

施設備品に関しては、居場所J,N,Qにおいて図書

関係やカードゲーム類が用意されているだけである。また、居場所 J, L, R, V は楽器類のみである。居場所 G には、机と椅子のみが設置されている。

これらのことから、開館時間の長さに加えて、常勤スタッフの多さ、施設設備や備品の多様性が来館者数の増加につながっていると考えられる。

IV. 居場所施設でのイベントの実態と可能性

居場所を継続させ、さらには利用者の数を増やす要素の1つとして、イベント運営が挙げられる。本章では、その実態を把握し可能性を検討する。

第3表 各居場所施設の設備と備品の関係性

	年間利用者(人)	常勤スタッフ(人)	非常勤スタッフ(人)	フリースペース	学習スペース	音楽スタジオ	会議室	サークル室	施設の備品
B	40,000			○	○	○	○	○	文庫本, 参考書(教材), ギター, ドラム, スピーカー, カードゲーム, 展示スペース, 自動販売機, 卓球台, Wi-Fi
C	50,000	7	3	○	○	○	○	○	漫画, 雑誌, 文庫本, 参考書(教材), スピーカー, カードゲーム, ボードゲーム, 展示スペース, コピックペン, SWITCH, 自動販売機, 卓球台, お菓子(無料), ジュース(無料), Wi-Fi
D	70,000	8	15	○	○	○	○	○	漫画, 文庫本, 参考書(教材), ダーツ, ビリヤード, ギター, ドラム, スピーカー, カードゲーム, ボードゲーム, 展示スペース, コピックペン, IPAD, SWITCH, yOGIBO, 絨毯, 給水機, 自動販売機, 卓球台, 簡易バドミントンネット, Wi-Fi
G	2556	3	2	○	○				給水機, Wi-Fi, 勉強用の机7台, 椅子
H	36,000	2	8	○		○	○	○	漫画, 雑誌, 参考書(教材), ドラム, スピーカー, カードゲーム, ボードゲーム, 展示スペース, 自動販売機, Wi-Fi
I	18,775	3	3	○		○	○	○	漫画, 雑誌, 参考書(教材), ギター, ドラム, スピーカー, カードゲーム, ボードゲーム, 展示スペース, 自動販売機, 卓球台, Wi-Fi
J	8,500	3	11	○					漫画, 文庫本, 参考書(教材), ダーツ, ビリヤード, ギター, カードゲーム, ボードゲーム, 展示スペース, テレビ, 給水機, 卓球台, Wi-Fi
L	6,500	1	3	○					漫画, 雑誌, 文庫本, 参考書(教材), カードゲーム, ボードゲーム, 展示スペース, 絨毯, Wi-Fi
N	7,283	0	9	○					漫画, 雑誌, 文庫本, 参考書(教材), カードゲーム, ボードゲーム, 展示スペース
Q	6,800	1	2	○	○	○		○	漫画, 雑誌, 文庫本, 参考書(教材), Wi-Fi
R	2,822	2	0	○	○				漫画, 参考書(教材), ダーツ, ビリヤード, カードゲーム, ボードゲーム, 自動販売機, 卓球台, 簡易バドミントンネット, Wi-Fi
V	200	1	10	○	○				漫画, 文庫本, 参考書(教材), ギター, カードゲーム, ボードゲーム, IPAD, テレビ, 絨毯, ジュース(無料), Wi-Fi

アンケートの回答があった12施設について作成。

1) イベントの年間開催数

イベントの年間開催数は、第4表のとおりである。居場所Cが90回、居場所Dは100回であるのに対し、居場所B,G,H,I,J,L,N,Q,R,Vは50回以下である。また、居場所G,Jに関しては5回未満である。

居場所C,Dは年間利用者数と常勤スタッフ数も多く、相関関係があることが読み取れる。これらのことから、利用者の数が多い理由の要因の一つにイベントの回数の多さをあげることができる。また、イベントをするには人手が必要なため、常勤スタッフが多いほど、イベント数が増えることも読み取れる。

2) イベントの種類と関係性

1. 各イベントの目的と内容

本研究ではイベントを音楽、多世代交流、講座、スポーツ、絵画、料理、勉強、年に一度の大型イベント、そして食事提供の9つに分類した。

音楽イベントはバンドや吹奏楽など、中高生の日頃の活動の成果を発表する内容や、ギターなどを講師から教えてもらう内容のものが見られる。

多世代交流イベントでは、居場所内での利用者の交流のきっかけを生み出すことが目的とされており、季節行事の内容が当てはまる。また、同施設内に児童館や高齢者スペースがあれば、小学生向けのイベントや高齢者との将棋体験などのイベントも含まれる。

講座イベントは、外部から講師を呼び、利用者のスキルアップを図ることを目的としている。楽器系、パソコン系、絵画系など、施設によって違いが生まれる。無料で行われているものもあれば、居場所の運営団体が別事業で行っているダンスや英会話、水泳などの講座を低価格で受けることができる場合もある。

スポーツイベントでは、身体を動かすことだけでなく、スポーツを介した利用者同士の交流を目的としている。学校で部活動に参加していない利用者に対しても、部活動に参加している利用者にも部活動がない曜日にイベントを設けることで、利用者が

運動する機会を設けている。内容は卓球が多くみられる。施設備品に卓球台を所持している場合が多いからだと考えられる。その他にも、バドミントン、フットサル、バレーなどもみられる。

絵画イベントでは、講座形式で絵画の技術を習得することが目的である場合や、利用者が日頃描いた作品を期間限定で展示する目的の場合もある。

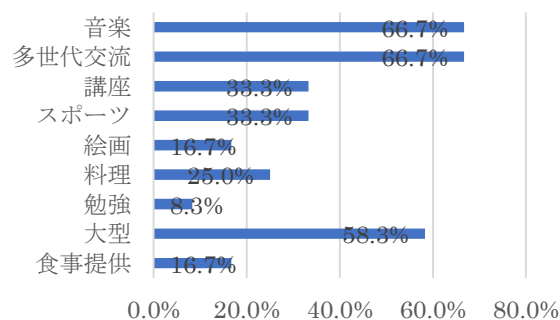
料理イベントは、利用者どうしで調理をしながら交流を深めることが目的とされている。また、日ごろの利用者との関わりの中で「料理をしてみたい」という声からイベントになる場合もある。バーベキューなど施設外で行われるイベントも施設によっては開催される。

勉強イベントは、利用者が学習に取り組むことを目的とされている場合に加えて、大学生のスタッフに質問をすることができたり、進路について相談できたりすることも目的とされる場合もある。これらは無料で行われることがほとんどである。

大型イベントは年に1回行われ、「フェス」や「夏祭り」と呼ばれることが多い。日頃の活動の成果を発表したり、利用者自身が企画したブース出展をしたりと、学校や地域の団体と連携しながら行われている。

食事提供イベントでは、子ども食堂のように、無料で食事が提供されている。地域の団体と連携して行われることが多い。

これら以外にも、キャンプや釣りなど野外のイベントや、LGBTQなど利用者の悩みに合わせたイベントなども見られた。



第7図 イベント講座の種類の割合

アンケート調査をもとに作成。

こうしたイベントは、随時開催されるものがほとんどであるが、スポーツイベントや講座イベント、勉強イベントなどは、定期的に行われていることもある。

2. イベントの種類と割合の関係性

イベントの種類は第7図のとおりである。音楽イベントと多世代交流イベントがどちらも66.7%である。

バンドやダンス、吹奏楽などは、学校で発表する機会が頻りに設けられにくく、コロナ禍でさらに減少した。音楽イベントによる積極的な機会提供のニーズが確認できる。

一方で、絵画イベントは16.7%、料理イベントは25.0%と少ない。使用する備品が多く、備品がそろっていない施設では開催できないことが要因と推察できる。

V. 居場所施設でのイベントの実態と可能性

地域による居場所の運営やイベントの違いを把握するために、イベントが盛んな以下の2施設に焦点を当てて調査し、今後居場所を運営していくために必要なことを抽出する。先述のように、ひとつは政令指定都市の神戸市で一番来場者と年間イベント数が90である「居場所B」である。もうひとつは、中核都市である尼崎市にあり、一番来場者が多く年間イベント数が100に近い「居場所D」である。この2つの施設のイベントの立案の仕方や中高生の主体性を促す方法などを検討する。

1) 施設の特徴の違い

2施設の特徴は第5表のとおりである。神戸市と尼崎市は、それぞれ政令指定都市と中核市である。大都市である神戸市では、地域の大人とのつながりや、地域の中高生同士のつながりが薄れてきていると考えられる。一方で尼崎市は地域の機能がまだ残っている。

第4表 各居場所施設の年間利用者数イベントとの関係性

	開館時間	運営団体	社会教育の詳細	年間利用者(人)	常勤スタッフ(人)	年間イベント数(回)	音楽	多世代交流	講座	スポーツ	絵画	料理	勉強	大型	食事提供
B	84	青少年育成	子育て支援 市民活動	40,000		50	○					○			
C	81	青少年育成		50,000	7	90	○	○	○	○				○	
D	80	青少年育成	生涯学習 子育て支援	70,000	8	100	○		○	○	○		○	○	○
G	79	市民活動活性化	市民活動 男女共同	2556	3	1	○	○						○	
H	70	青少年育成		36,000	2	10	○	○	○		○			○	
I	70	青少年育成		18,775	3	23	○	○							
J	58.5	福祉	児童館	8,500	3	3	○	○							
L	55	青少年育成		6,500	1	30		○							
N	47	青少年育成	文化センター	7,283	0	18	○	○		○		○		○	
Q	46	青少年育成	文化センター	6,800	1	15		○							
R	45	青少年育成	地域総合センター	2,822	2	24						○		○	○
V	7	青少年支援		200	1	15			○	○					

また、施設の立地をみると、居場所Dが最寄り駅から徒歩15分であるのに対して、居場所Cは最寄り駅から徒歩5分である。ここに利用する中高生の特徴の違いが見られる。居場所Dは居場所施設の近くの中学校4校ほどの校区から大勢の中高生が集まっており、尼崎市に在住する中高生の利用がほとんどである。一方で居場所Dでは近くの中高生が利用することに加えて、通学の乗り換えで最寄り駅を利用する中高生の利用もみられる。そのため、地元の中高生に加えて、居場所Cの施設からは居住地が遠い中高生も利用しており、より多様性がある。

利用の仕方としては、居場所Dはおしゃべりやゲームなど、自由に過ごしている利用者が多いのに対して、居場所Cではおしゃべりやゲームなどを目的に来る利用者もいるが、勉強スペースに勉強をしにくる利用者も多い。特にコロナ禍によって勉強を目的に来る利用者が多くなったという。テスト期間では、居場所Dはフリースペースでは遊んでいる利用者が多いことに対して、勉強スペースがフリースペースが共存している居場所Cではフリースペースの全てを勉強する利用者が占める。

このような背景から、それぞれが抱える課題がある。尼崎市ではもともと地域の課題として、一人親世帯の数や虐待の件数が多く、福祉の面での課題が多い。さらには中高生の1日あたりの勉強量の少なく、教育や体験格差が見られる事例が多い。

これらのことから、フリースペースにも違いが生まれる。居場所Dは机やいすに加えて、絨毯やソファがあり、くつろぐことができる設備がある。一方で、居場所Cでは机と椅子が並べられているほか、勉強に集中しやすいように仕切りがつけられているスペースも存在する。また、勉強しに来る利用者とのコミュニケーションが生まれるよう、「喫茶ハーバー」というカフェを随時で運営しており、無料で飲み物がもらえる。この喫茶を通して、何気ないコミュニケーションの機会を生み出している。

2) イベントの違い

イベントは、利用者同士の交流を目的としているものと、スキルアップを目的としているものに分け

られる。居場所Dでは交流、スキルアップどちらも見られるのに対し、居場所Cでは交流を目的としてイベントが主である。居場所Dでは貧困家庭の割合が多く、習い事や塾に通っていない利用者が多い。かれらのやってみたいことを叶えるためにも、講座系のイベントを設けている。

ライブなどの日頃の成果発表会に関しては、居場所Cでは商業施設内に中高生の居場所があるため、商業施設の1階のエントランスホールを利用している。居場所Dでは施設内のホールで開催する時もある。生涯学習センターの一室を借りて行う場合もある。イベントの内容が同じでも、実施する場所が変わってくる。

イベントを行うことで、定期的に通う利用者に非日常の空間を生み出している。全員が参加するわけではなく、好きなときに好きなイベントに参加する仕組みになっている。また、イベントを行うことで、イベントを目的に新たな中高生が居場所を訪れるきっかけを生み出せる。第6表のように、イベントの目的は同じでも、イベントの種類、数、地域との関わりなどに違いが生まれることがわかる。

VI. おわりに

本研究の目的は、兵庫県における中高生の居場所施設の実態を明らかにすることであった。特に、実施されているイベントの種類や目的、特徴の違いに注目した。

研究の結果、多くの利用者に来てもらうには、長時間の開館、常勤スタッフの数の多さ、年間イベント数の多さが必要とわかった。開館時間を長くするためには、全世代対象の生涯学習センターなどの一部を利用することが鍵になる。また、スタッフの中でも、常勤スタッフが多いほど、利用者との関係性を深めることができ、利用者が居場所で過ごす充実度につながるため、大事だと考えられる。施設備品では、定番である図書関係とカードゲーム類に加えて、楽器類や運動器具、テレビゲームなど備品の種類が多様なほど利用者の増加につながる。利用者が過ごし方をたくさんの選択肢から選べることで、利用者を継続的に増やす鍵であると言える。

第5表 各居場所施設の設備と備品の関係性

	居場所D	居場所C
年間来館者数	70,000人	50,000人
駅からの距離	15分	5分
常勤スタッフ数	8人	7人
非常勤スタッフ数	15人	3人（大学生のアルバイトはいない）
街の特徴	中核都市 地域の機能がまだ残っている。市民活動が盛ん。	政令委指定都市 都市化しており、地域の機能が早くから薄れてきている。
利用者の特徴	尼崎市の園田地区の中高生が多く来ている。そのため、4つほどの中学校の校区の中高生がほとんどである。	近くの学校に通う子もいれば、駅近ということもあり、通学の途中下車で利用する子もいる。利用する学生の住んでいる地域は多様性。
街の子どもの課題	・テレビ・ゲーム・スマートフォンにかける時間が長い ・1日あたりの学習時間が短い ・学校の勉強がわからない中学生の割合が比較的高い ・相対的貧困層やひとり親世帯の中学生は部活動への参加の割合が低い ・子どもが家族と一緒にする文化的な活動が乏しい ・大学程度の教育を希望する子どもの割合が低い	・勉強で利用する子どもが多い。
フリースペースの特徴	机やいすが置いてあるスペースもあれば、リビングのようにくつろいで漫画を読むことや、ゲームをすることができる。交流が生まれるような配置にソファを置いてあることで、別々できた利用者同士が交流し繋がれるきっかけを生み出している。みんなが集まって一緒にボードゲームで遊んだり、それぞれやりたいことに取り組んでいたり、一人ひとりが思い思いに利用している。ラウンジにはスタッフが2名以上常駐しており、若者が安心して過ごすことができるように見守りを行うだけではなく、一緒にゲームをしたり、時には勉強を教えたりするなど、親や先生ではない、「ナナメの関係」を意識しながら若者と日々関わっている。	机といすがぎっしり並べられている。おしゃべりスペースと勉強スペースが共存している。そのため、大きな声で騒いだりできない。 「喫茶ハーバー」というカフェがあり、無料で1日1杯飲み物を配っている。勉強をしに来たともたわいもないコミュニケーションをとる機会を設けている。 また、SWITCHをするスペースがある。 コロナ前は勉強以外にも活発だったが、コロナ以降は勉強の利用が多くなった。テスト期間では机が勉強をする利用者で埋まるようである。
フリースペースのレイアウト	机、いす、絨毯、ソファなどがある。絨毯やソファがあることで、寝転んだり、睡眠をとったりもできる。ところどころに、棚を設けており、仕切りとなっている。職員から近い側はオープンになっており、職員の席から遠くなるにつれて、仕切りが多く、プライベートな部分が少しある。一度に8人ほど座れる机があり、複数のグループが一度に座ることができ、交流が生まれている。	机、いす。部屋の半分は勉強用の仕切りがついた机がある。奥になると静かに勉強するスペースがあるため、大きな声で騒ぐことができない。大学の案内や赤本（関関同立以上）も置いてある。 これまでのイベントの写真が掲示されており、今までの活動が利用者にもわかりやすいになっている。

インタビュー調査をもとに作成。

第6表 イベントの詳細

①交流	☆ライブ系 バンド活動をする利用者の発表の機会を設けている。施設内のホールで行うこともあれば、 ☆利用者やってみたいを実現するイベント バスケットボール大会、カラオケ大会、パズルを完成させる会など 日々の利用者とのコミュニケーションから「やってみたい！」を引き出し、イベントにしている。 ☆スポーツデイ 卓球とバドミントンをメインに週1で開催している。 ☆交流イベント クリスマスやバレンタインなど季節に合わせた行事を行っている。	☆なんでもライブ 歌やダンスなど得意なことを披露する。 青少年会館内でやることもあれば、ハーバーセンターのホールで路上ライブ的にやることもある。 定期的に開催している。 ☆喫茶ハーバー 勉強の帰りにフラットホッと一息づけるような場所。それを通して、職員と顔のわかる関係性。ななめの関係を作る。 蓄積してくことで、悩みを相談してもらおう。 ☆中高生部活動 部活的なコンテンツを用意している。途中参加退出できて、ゆるくいつでも参加できる。卓球、モルック、Eスポーツなど。 ☆交流イベント 毎月、季節の行事や中高生が「熱中していること」にちなんだイベントを取り組んでいます。 8月：夏休みEスポーツ大会。9月：お月見イベント。10月：ハロウィン
②スキル	☆ユースカフェ 勉強イベントである。利用者が勉強する機会を設けたり、別館の学習スペースで勉強している中高生とコミュニケーションのきっかけをつくったりする。 ☆講座系 ギター講座、プログラミング講座、イラスト講座	
③大型イベント	☆ユースフェス 運営メンバーを結成し、利用者とともに企画運営する。 場所：施設内 ステージ出演：バンド コンテンツ：サバイバルゲーム、カフェ 出店：中高生が企画するブース 地域の団体の出展	☆会館フェス 12名大学生が実行委員となり、ステージやゲームコーナー、体験ブースを企画運営していた。 場所：ハーバーセンターのホール ステージ出演：近くの高校のダンス部、コーラス部、吹奏楽部など 出店：中高生が企画するブース、地域の会社、団体 体験ブース：ピンポンカップイン、ヨーヨー釣り、パターゴルフ
中高生が主体でやってみたいを実現する団体	YSC 居場所の運営をするチームである。新たに購入する備品を選んだり、イベントの計画をしたりする。イベントの計画の中には自分たちで企画をして実現まで行う場合もある。	AYC 中高生がやってみたいことを仲間と協力し実現することを目的としている。 メンバー：こうべユースネットのキャンプ事業の参加者だった子がほとんど。青少年会館の利用者から生まれているわけではない。現在10名 実施例 ・キャンプ、アスレチック、餃子肉まんづくりなど ※青少年会館の中での実施はない
イベントの課題	・バリエーションが少なくなっている。	・20代のスタッフが少なく女性のスタッフがいない。 ・一人で勉強している子を巻き込めない。 ・人手不足 大規模イベントをする際に、ハーバーのイベントスペースが土日高い
地域連携について	LGBTの活動を行っている団体、ユースクリニック	会館イベントに外部講師を呼んでいる。 地元の団体や神戸市の職員など職員のつながり。

インタビュー調査をもとに作成。

イベントに関しては、年間利用者や年間イベント数が多い2つの施設を調査したところ、違いがみられた。イベントは交流を目的としたものと、スキルアップを目的としたものとに分けられるが、その塩梅は施設を利用する中高生の特徴や課題によって変化することがわかった。つまり、地域の特徴によって柔軟に対応する必要があることが読み取れる。

以上から、中高生の居場所を運営していくにあたっては、施設の設定や備品、スタッフの数などについてはマニュアルを作り実践することで、より多くの利用者が訪れる居場所を展開することができると考えられる。しかし、イベント等は地域や利用者の特徴や課題に合わせて、臨機応変に対応することが求められると言える。

文献

御旅屋 達 (2012) : 子ども・若者をめぐる社会問題としての「居場所のなさ」—新聞記事における「居場所」言説の分析から、年報社会学論集 (25) , 13-24

川崎千恵 (2017) : 乳幼児を育てる母親が認識する地域活動への参加によりもたらされたものと地域活動の特性, 日本公衆衛生看護学, 2017 年 6 巻 1 号, 19-27

木下誠一・矢部亮・今井正次 (2008) : 居場所としての地域公共 施設のあり方に関する研究-三重県における居場所選択特性と地域差 -, 日本建築学会都市計画論文集第 628 号, pp. 1205-1212

公益財団法人 兵庫県青少年本部 : 2023 年度「若者の居場所」紹介ページ (2023 年 10 月 1 日現在) | 兵庫県青少年本部 (seishonen.or.jp) (2024 年 1 月 21 日最終閲覧)

公益財団法人 兵庫県青少年本部 : 若者の居場所 兵庫県青少年本部 (seishonen.or.jp) (2024 年 1 月 21 日最終閲覧) 渋谷ファンイン【公式サイト】 渋谷子どもの居場づくり実行委員会トップページ : 渋谷ファンイン【公式サイト】 渋谷子どもの居場所づくり実行委員会 (shibuya-huanying.com)

こども家庭庁ウェブサイト : こどもの居場所づくり

に関する調査研究 報告書概要 (cfa.go.jp) (2024 年 1 月 21 日最終閲覧)

定行まり子、根橋由里子 (2004) : 児童館における中高生 対応 についての考 察地域における中高生の居場所に関する研究その 1, 日本 建築学会計画系論文集第 577 号, pp. 49 -55

内閣官房ウェブサイト : NPO等と連携したこどもの居場所づくり支援モデル事業について | 内閣官房ウェブサイト (cas.go.jp) (2024 年 1 月 21 日最終閲覧)

中島喜代子・山中 章子・松崎明日香・井上真理子 (2013) : 中高生の居場所形成のための公共施設利用に関する研究— 中高生に対する調査 —三重大学教育学部研究紀要 第 64 巻 社会科学 (2013), pp. 115-124

(いとう つばな・奈良教育大学教育学部生、こうもと だいち・奈良教育大学)